むのは，決してわたしだけではあるまい。幸いに，“このつぎにはわたくしも新しい構想で別な性格心理学を書いてみたい”とあるからには，是非第3の里標をうちたてて，われわれの人間知を啓発してほしいものである。　（さがらもりじ）

歴史学

新　刊　紹　介

最近出版された書物で，ぼくの読んだもののうち，歴史・経済史関係のもの数冊を紹介したいと思う。まず初めに，ベンジャミン・ファリントン『フランシス・ベイコン—産業科学の哲学者—』（松川七郎，中村恒矩訳，岩波書店）をとりあげたい。ベイコン（1561年—1626年）といえば，誰でもアリストテレス哲学やスコラ哲学の伝統的学問を批判して，実験と観察とを基礎とする帰納的方法によって自然の解明を企てた哲学者を，あるいは人が真理に到達するのを妨げる先入観として「種族の偶像」「洞窟の偶像」「市場の偶像」「劇場の偶像」を指摘した哲学者を思いだすだろう。ベイコンは生前『随筆集』（初版・1597年，第2版・1612年），『学問の進歩』（1605年），『古代人の英知』（1609年）『大革新』（1620年）を公刊したほか多くの草稿（ことに『ニュー・アトランティス』）を残したが，それらのうち，ファリントンによると，晩年の『大革新』こそはすでにケムブリッジ在学中（12才—15才）からかれの心をとらえて生涯離れることのなかったベイコンの思想を最終的に表明した著述であって，それ以前の諸著書は『大革新』のための準備作業であった。すなわち，ベイコンの計画によると『大革新』は六つの編から成るはずであったが，実際には六つの編のうち第二の「新論理学」（「ノヴム・オルガヌム」）と第三の要約を含むだけの断片に過ぎなかったため，『大革新』と名づけられた書物はその計画の一部分の名，つまり『新論理学』という名でよばれるようになった。ここに重大な歪曲が生じた。すなわち『大革新』は人間社会の全面的な改革を唱道する書物から論理学の書となり，ベイコンは社会の改革者から論理学の改革者へと矮小化させられたのである。本書の著者はこのような見方に立って，『新論理学』を『大変革』の一部として正しく位置づけることにより（第5—8章），ベイコンの全著作・全思想を再検討し，新しいベイコン像を作りあげようとする。かくして，本書の副題が示すように，著者はベイコンを「産業科学の哲学者」として把握し，その思想を「知識は仕事のなかで結実しなければならないということ，科学は産業に応用されるものでなければならないということ，人は生活の諸条件を改善し変革するための神聖な義務として自分たちを認識しなければならない」という主張にありとする。ベイコンの著作の内在的研究だけでなく，ベイコンの生きた時代に関する最近の歴史学的研究成果や問題意識を正しく摂取したことによって，著者はこのような注目すべき見解に到達したと思われ

る。その意味で，わが国にも周知のマートンらの科学史研究，ネフ（『16・7世記の産業と政治』，1940年）やトーニー（『ジェントリの勃興』，1941年）の経済史研究，あるいはウェーバーの提起したカルヴィニズムのエトスの問題などをふまえて，著者がベイコンの人と思想の形成を時代的背景の中にあとづけている部分（第1—4章）が興味深かった。

ところで，ベイコンは権威や伝統に挑戦して自然そのものを分析し，自然法則への服従によって逆に自然を征服するという思想によって胎動しつつあるイギリス資本主義の発展方向を指し示しながら，他方で，生涯を通じて絶対主義君主の廷臣として仕えたし，またモーアの『ユートピア』が政治と社会の改革を提案しているのに比べて，『ニュー・アトランティス』が現存社会秩序に対する批判を欠いていたことに注目すべきであろう。この点について，著者はベイコンが科学の尊重を国王ジェイムズ一世の賢明さに期待していたのだという以上のことを述べていないが，もしこのような点に真正面から取りくめば一層すぐれたベイコン像が浮かび上り，それによってかれの生きた激動の時代も逆に照射されたのではないかという感じがした。巻末に『ニュー・アトランティス』中の「ソロモン学院」についての記述が付加されている。明晰で正確な邦訳が二人のすぐれた翻訳者の協力で行われたことに感謝したい。なお原著の出版は1949年である。

つぎに，ごく最近出版された高橋幸八郎・古島敏雄編『近代化の経済的基礎』，大塚久雄編『西洋経済史』の二著はそれぞれの編者と執筆者の協力のおかげでわが国の経済史研究に多大の寄与をなすとともに，現時点における経済史研究の水準と問題関心を最もよく示す労作である。前者は戦前から戦後にかけてわが国の経済史研究，いな広く社会科学研究の全領域において指導的役割を果され，その門下に多くの俊秀を育てられた大塚久雄氏の還歴を記念する「論文集」の第1巻である。内容は封建社会を取り扱ったⅠ，英・仏・独の資本主義成立期を論じたⅡ，アメリカⅢ，日本Ⅳの4部，21篇をもって構成されている。個々の論文は自由に執筆者個人の最も得意とするテーマについて論じられているが，一冊にまとめられた結果は，おのずから，大塚教授が長い研さんと思索の過程でとりあげられた資本主義成立期の諸問題を各局面においてそれぞれの仕方で継承発展させてゆこうとする姿勢が窺えて興味深い。各論文を紹介する余裕はないが，筆者の個人的関心から言えば，第Ⅱ部の諸論文，すなわち，絶対王制期の反独占運動の意義を考察された小林栄吾氏の論文，イギリス市民革命の土地変革を扱われた椎名重明氏の論文，ジョン・ロックの「土地単税論」を考察された石坂昭雄氏の論考，ヴォーバンの『国王十分の一税案』に固有の重商主義の一先駆形態をみようとされる遅塚忠躬氏の研究，イギリス毛織物工業の構成と海外市場の動向との関連を究明される船山栄一氏の業績，フランス革命と明治維新を比較考察される高橋幸八郎氏の論稿が印象に残った。

『西洋経済史』（筑摩版「経済学全集」第11巻）は研究史の回顧をふまえて，近代化の歴史的起点を市場構造論の観点から局地的市場圏に求められるすぐれてポレミックな

第1章，農村工業と特権的大産業（第2章），国民経済の構造変革（第3章），イギリス・フランス・ドイツの産業革命（第4—6章），市場および金融の発達（第7章），アメリカにおける大量生産体制の発展（第8章）からなり，編者も含めて8名の執筆者によって分担されている。大塚氏の旧著『欧洲経済史』がイギリス産業革命の前夜で筆を終えているのに対して，本書の3分の2近くが産業革命およびその後の時期の叙述に当てられていることはなによりも本書の特徴であり，またそれがわが国の経済史研究上の関心と動向を反映していることは言うまでもない。わが国におけるヨーロッパ諸国の産業革命史研究は最近10年位の間に急速に進展し，今後も最も実り多い分野であろうが，従来の研究の諸成果がともかくも現在の時点において，すぐれた執筆者により整理され，体系的に敍述されたことは大きな意義をもつであろう。水準の高いすぐれた「西洋経済史」の概説書をえたことを喜びたい。なお筆者は第7章「市場および金融の発達」に大いに啓発されたことをとくにつけ加える。別冊として米川伸一氏の力篇「経営史学の成立と課題」が付せられている。

最後に，井上幸治著『秩父事件—自由民権期の農民蜂起』（中公新書）を読んだ。井上氏はフランス近代史を専攻される方であるが，氏の故郷，秩父の困民党について長い間多方面にわたって史料を探索され，その研究の成果を問われたのが本書である。「秩父事件が自由民権運動の最後にして最高の形態」であるという立場から，独特の簡潔な文章で緊迫した情況のうちに困民党運動の発端から壊滅に至るまでの諸局面が述べられている。ただし，本書の敍述は「秩父事件」のみを対象としているので，「秩父事件」を自由民権運動の一環として位置づけ，正しく評価するためには，自由民権運動史について若干の知識が読者に要求されるであろう。（栗原　福也）

近代中国をめぐる国際関係

今春になって私たちは，ほとんど同時に＜中国をめぐる国際関係＞に関する3冊の著書を手にすることができた。それは坂野正高・衛藤瀋吉編『中国をめぐる国際政治——影像と現実——』（東大出版会，A5判347ページ，1200円），衛藤瀋吉『近代中国政治史研究』（東大出版会，A5判 302ページ，1200円）および同じく衛藤『東アジア政治史研究』（東大出版会，A5判 354ページ，1500円）の3冊である。いずれも衛藤の著書もしくは編著である。坂野は東大法学部教授で，衛藤とともに植田捷雄門下である。衛藤は周知のように東大教養学部の国際関係論の教授で，最近はテレビや新聞・雑誌などにも盛んに登場して大いに活躍しており，マスコミの寵児になっている。さきに「日本の安全保障力をどう高めるか」で第1回吉野作造賞を受けたが，この論文をも収録した『無告の民と政治——新生日本外政論——』（番町書房）という時事評論集もある。